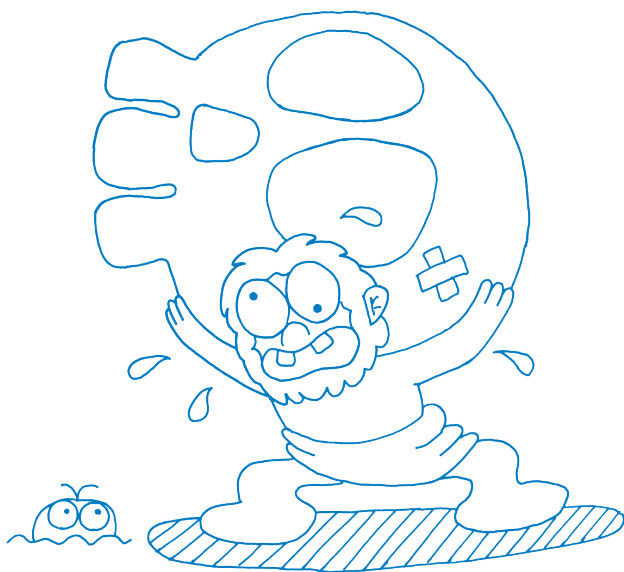


解剖学 イラスト事典

第4版

松村 讓兒

杏林大学医学部客員教授



中外医学社

改訂にあたって

本書を手にとってくださった皆様！ 本書は「解剖学は暗記しなければならない用語が多すぎる！」という絶望的状况に悩んでいる方に、少しでも希望を与えられればと思い、「解剖学用語という砂漠のオアシス」をめざし、「解剖学用語」を勝手に選んで編纂した事典です。「どこが事典？」とのご意見もあると思いますが、学生時代に「わからん」と感じた用語を集めたメモ帳と思って頂ければ幸いです。

本書は、22年前、「日本一読みやすい解剖学事典！」をめざし、昼間も寝ずに準備して作成したものです。日頃、解剖学用語は「憶える」のではなく「理解する」のだと豪語していましたが、それを具現化する機会を中外医学社からいただき、調子にのった次第です。

書き始めた当初は、「事典＝簡潔かつ正確に定義された用語集」という鉄則に気がきませんでした。表記を勝手に変えることもならず、独りよがりな解釈を記すことも許されません。「オアシス」どころか「泥沼」にはまった気分の中、イラストの描画と説明文の執筆という孤独な作業を続ける羽目になりました。もっとも頭を痛めたのは漢字表記と読みの決定です。領域で異なる「医学用語」、「読み方」、「英語表記」などは本当に手を焼きました。本書が出版に漕ぎ着けられたことは「奇跡」そのものといわなければなりません。

さらに、誰もが「売れない」と断言していた本書が、20余年に亘って生きながらえてきたのも「驚き」です。出版社の販売努力の成果か、それなりに使い道があったのか、それとも誤って購入してしまった方が多かったのか、いずれにしても、本書をご購入頂いた皆様には衷心より感謝申し上げます。（願わくは、本書が書店の事典コーナーに置かれることを夢見ておりますが……）

今回の改訂にあたり、多くの皆様にお世話になりました。とくに、定年後も教室の一部屋を「執筆とイラスト作成の場」として使わせて頂いただけでなく、多くのご教示を頂いた、杏林大学医学部肉眼解剖学教室の長瀬美樹教授や教室員の皆様、無謀な出版と改訂を決断してくださった中外医学社企画部の小川孝志氏、同編集部の中田英治氏には改めて御礼申し上げます。

2023年5月

松村讓兒

はじめに

医療従事者をめざす人たちは「解剖学はとにかくたくさんの用語を憶える科目」と思っているようだ。そして、解剖学の授業が始まるとともに「訳の分からない解剖用語」が「津波のように押し寄せてくる」と感じるという。その結果、たくさんの人が「解剖用語の海」の中で溺れてしまうらしい。このまま行けば、今、この本を手にとっているあなたも「解剖用語の海に漂うモクズ」となってしまうかもしれない。

本書は、すでに溺れてしまった人も含め、「解剖用語の海」を泳ぐための手助けになるように、との願いを込めて作られた「解剖学事典」である。また「事典」としてばかりはでなく、見開き読み切り形式の「解剖学入門書」としても使えるよう、かつて「解剖用語の海で溺れかけた著者」が「ワラをもつかむ」気持でアレンジした。パラパラと気楽にめぐりながら「クイズ」のつもりで読んで頂ければ本書の利用価値は倍増し、確信を持って「ワラよりずっと役に立つ」と断言できる。

この本は、これまでに献体された多くの方々から頂いた「無言の教え」や、学生から寄せられた「数々の不平や文句」があればこそできたものである。改めて感謝の意を捧げたい。

また、原稿作成中の平成12年度実習に亡父の遺体が供され、学生とともに解剖を行うことができた。これにより、いくつかの記載を確かめることができたことは望外の喜びであった。

本書を書き上げるにあたっては、多くの方々にご教示・ご協力を賜った。とくに小林靖助教授をはじめとする杏林大学医学部第一解剖の方々には、ある時は尻を叩かれ、ある時は頭を叩かれながら「檄」を飛ばして頂いた。また、出版にあたっては中外医学社企画部の小川孝志氏、編集部の久保田恭史氏にお骨折り頂いた。この場をお借りして厚く御礼申し上げる。

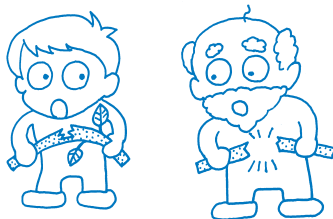
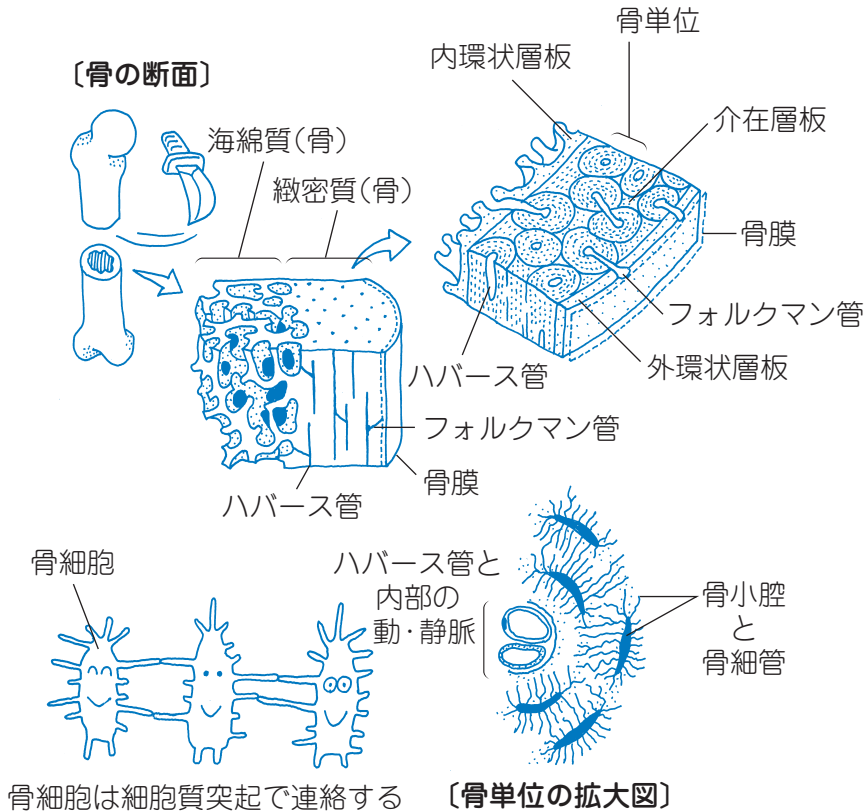
末筆ながら、本書を購入された方には著者として最大の感謝を捧げたい。そして、もし不十分な記載や誤まりについてお気づきの点があれば、是非ともお知らせ頂き、ともに「解剖用語の海」を泳いで行きたいと願っている。

2001年1月

松村讓兒



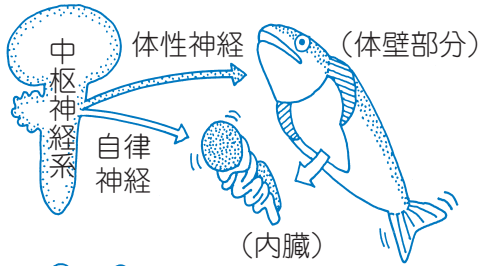
骨組織について



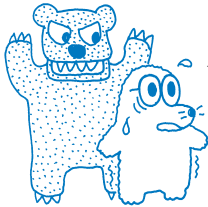
若年者では生木のように、
老年者では枯木のように
骨折がおこる。



自律神経系

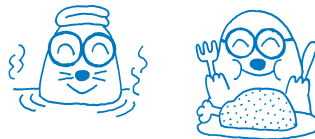


自律神経系は
眠っていても
働いている。



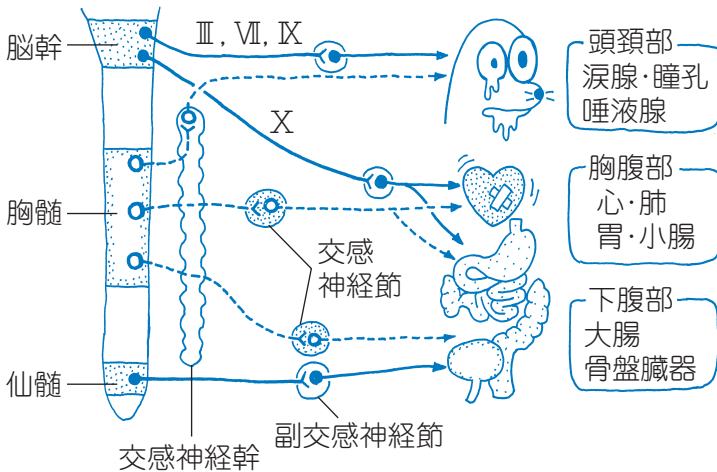
戦闘状態!!

(交感神経系の作用)



安静状態

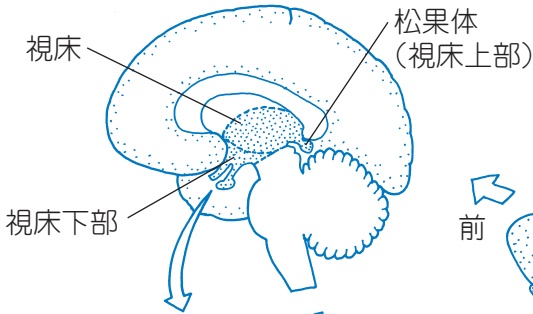
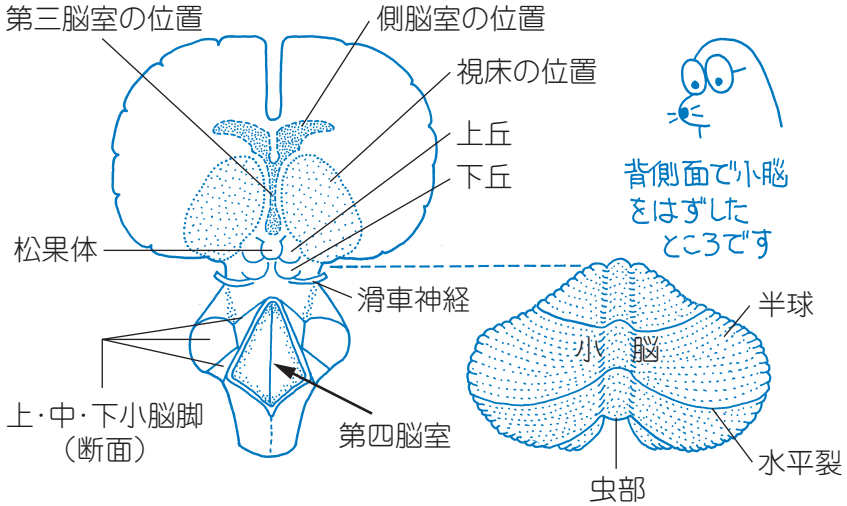
(副交感神経系の作用)



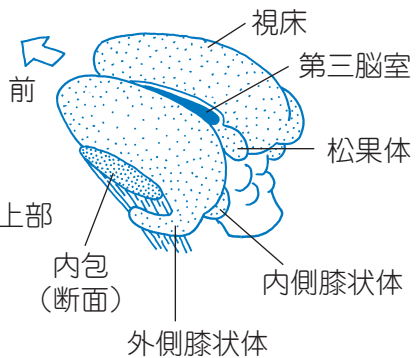


間脳のはなし

〔間脳(視床)の位置〕



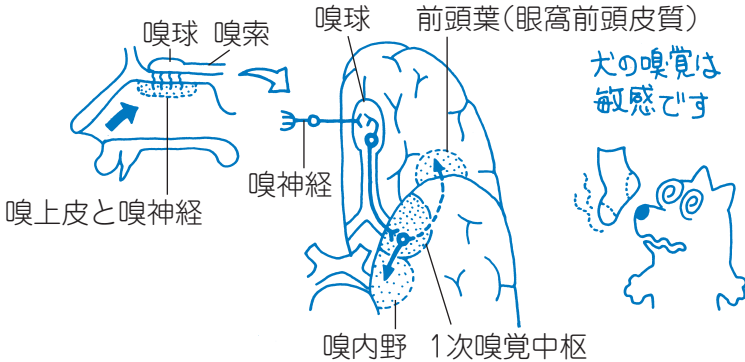
〔左後方からみた間脳〕



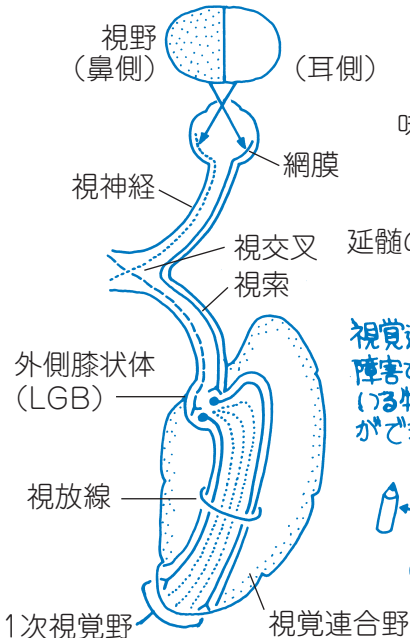


特殊感覚の伝導路 (1)

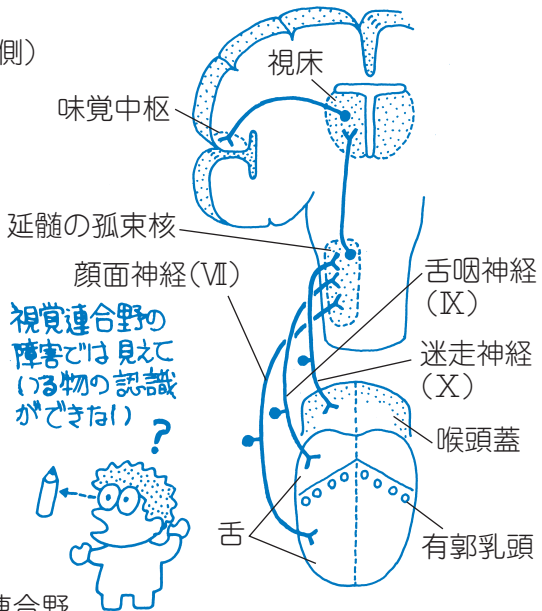
〔嗅覚の伝導路〕



〔視覚の伝導路〕



〔味覚の伝導路〕



人名のついた用語 (アイウエオ順)

アキレス腱 Achilles tendon ● **踵骨腱 calcaneal tendon** (下腿三頭筋の停止腱)。ギリシャ神話の英雄アキレスの唯一の弱点が踵にあったことに由来。海の女神テティスはアキレスを不死の身体にすべく、足首をつかんで黄泉の川ステュクスに浸した。この時、つかんだ踵だけが濡れず、弱点として残った (注: 別の逸話もある)。成長してトロイ戦争に出陣したアキレスは、トロイの王子パリスの放った矢が踵に当たり死に至る。

アダムのリンゴ Adam's apple ● **甲状軟骨 thyroid cartilage** による **喉頭隆起 laryngeal prominence** のこと。いわゆる「のど仏」である。禁断の木の実 (知恵の実) を食べたアダムが、これを喉に詰らせたことに由来する。リンゴではなく無花果という説もある。英国の詩人 John Milton (1608-1674) の叙事詩「失楽園 Paradise Lost」で禁断の実をリンゴと表現したことに始まるというが、ドイツの画家 Albrecht Dürer の絵画「アダムとイヴ」ではすでにリンゴとして描かれている。ただ、医学用語として登場するのは1750年頃のことである。



アダムキービッツ動脈 artery of Adamkiewicz ● **大前根動脈 a. radicularis magna**。下部胸髄～腰髄においてみられるとくに発達した脊髄前根動脈。通常、左側の第8肋間動脈～第2腰動脈間で分岐する。ポーランドの病理学者 Albert Wojciech Adamkiewicz (1850-1921) が報告した。



アダムス・ストークス症候群 (発作) ● **Adams-Stokes syndrome (attack)** 心臓の除脈あるいは頻脈に起因する脳虚血症状 (一過性の失神やめまい)。1827年にアイルランドの外科医 Robert Adams (1791-1875) が、1846年にアイルランドの内科医 William Stokes (1804-1877) が報告したことで命名されているが、最初の発見はカルニオア (現在のスロベニア) の医師 Marko Gerbec (1658-1718; ラテン名 Marcus Gerbezius) による。元々は「完全房室ブロックによる失神と痙攣を来す疾患」として Stokes-Adams disease とよばれた。